

## スペイン語

### 一 前史 ー日本とスペイン語圏との関係

#### スペインとの関係

日本人が最初に接触した西洋人はイベリア半島からやって来た。戦国時代の一五四三(天文十二)年、種子島に來航したポルトガル人が最初に日本に到達した西洋人であり、通説ではこのとき鉄砲が日本に傳來したとされる。一五四九(天文十八)年、キリスト教が初めて日本に伝わるが、このとき鹿児島に來航したフランシスコ・ハビエル(通称ザビエル、当時の音ではシャビエル) Francisco Javierら三人のイエズス会宣教師が、実証されるところでは最初に日本に來たスペイン人である。この時代にはスペイン・ポルトガルとの交易が盛んに行われ、キリシタン布教に伴って文化的交流も行われた。そうした事績をしのばせるものとしては、十六世紀末から十七世紀にかけて天草や長崎でイエズス会が出版したキリシタン版があり、その中には日本で最初のスペイン語文献の翻訳「ぎあどべかどる」(罪人の導き、一五九九年)も含まれる。しかし、徳川幕府のいわゆる鎖国政策によりイベリア諸国との関係は十七世紀前半に途絶えてしまう。

十九世紀半ば、アメリカの砲艦外交に屈伏し、日本は開国する。スペインとの外交関係は、一八六八(明治元)年

新政府が通商航海条約を締結したことにより復活した。スペインはかつての栄光を失い、中南米の植民地は大部分が独立していたが、太平洋海域では依然としてフィリピン、グアム、マリアナ・カロリン・パラオ諸島などを支配していた。この中で特に維新後の日本にとって重要だったのは、近隣のフィリピンの動向であった。ここでは十九世紀末にホセ・リサル Jose Rizal らによる独立運動が起き、東京外語が復活する前年の九六年にはエミリオ・アギナルド Emilio Aguinaldo らに率いられた武力蜂起によりフィリピン革命が始まった。初め独立運動を支援していた米國は、一八九八（明治三十一年）年の米西戦争の結果、スペインに入れ替わってフィリピンの支配者となると、独立軍の徹底的な討伐をはかった。一九〇二（明治三十五年）年に独立戦争は鎮圧されるが、その過程で二〇万以上の住民が犠牲になったと言われる。日本では独立運動に対する同情が強かったが、日米関係を重視する政府は傍観するしかなかった。しかし、独立運動を密かに支援する民間の志士が多数おり、独立軍に参加した者もいた。こうした国際情勢の中で外語創立期に入学した西語科生は、遠い中南米よりもフィリピンへの雄飛を考えていた者が多く、米西戦争の結果フィリピンが米國領になると大きな衝撃を受けたと言う。

### 中南米諸國との關係

日本にとって重要なもう一つのスペイン語圏との關係は中南米諸國に対するものである。一八七三（明治六）年にペルーと修好仮条約が締結され、中南米諸國と最初の外交關係が結ばれた。これは前年に起きたマリーア・ルス号事件（ペルー船が奴隷扱いで輸送中の中国人労働者を日本政府が横浜港で解放したことをめぐって外交問題となる）が契機となっている。ところで、明治期の日本にとって幕末に押しつけられた不平等条約を改正し、完全な独立國としての主權を回復することは最大の國家的悲願であった。その完全達成は、明治末まで待たなければならなかったが、

日本にとって最初の対等条約は一八八八（明治二十一）年メキシコと締結した修好通商条約である。この条約締結により中南米では最初の日本領事館がメキシコに開設され、東京外語が復活した一八九七（明治三十）年に定住を旨としたものとしては最初の中南米移民がメキシコ南部のチアパス州に入植する。榎本武揚前外相が企画した「榎本殖民」の青年たちである。入植は事前調査の不備と資金不足のため短期間で失敗に終わるが、この後ペルー、ブラジルと続く中南米移民の先駆けであった。移民と貿易を中心とする中南米諸国との関係は、その後の日本にとってますます重要なものになる。こうした国際関係を背景に東京外国語学校の中に西語科が誕生し、成長して行くことになるのである。

## 二 東京外国語学校時代

### 1 西語科から西語学科へ 一八九七—一九一九年

#### 西語科の創設

日清戦争（一八九四—一八九五年）と戦後の三国干渉は、日本の官民に国際関係の重要性と外国語に熟達した人材育成の必要性を改めて認識させることになった。日清戦争後はまた日本人の海外渡航熱が高まった時代でもあった。帝国議会の建議を承けて、一八九七（明治三十）年四月、時の伊藤博文内閣は高等商業学校附属外国語学校を開設した。ここに一八八五（明治十八）年の廃校以来、二年ぶりに外国語学校が復活する。このとき設置された七語科の中に日本で初めてスペイン語専攻の課程が西語科の名で登場する。ちなみに、一八七三（明治六）年創立の旧東